一代男

三、四

1348
2

繪入

好色一代男

三四

好色一代男

巻三 目録

二十一歳　恋の山乃ぼりさてかゞ孫来る者乃事

二十二歳　袖乃海の玄人受下れせき越世乃事

二十三歳　一夜乃枕恨こゞろあ世ぬ世ぬ

二十四歳　大きゝ寺乃事

二十五歳　集れハ九あ乃ゆ

二十六歳　熱海寺源氏世乃事

二十七歳　本修布子を加ら乃世

切見世遊安楽乃飛ぶ世

ひ長乃事ら世

縣神子乃事

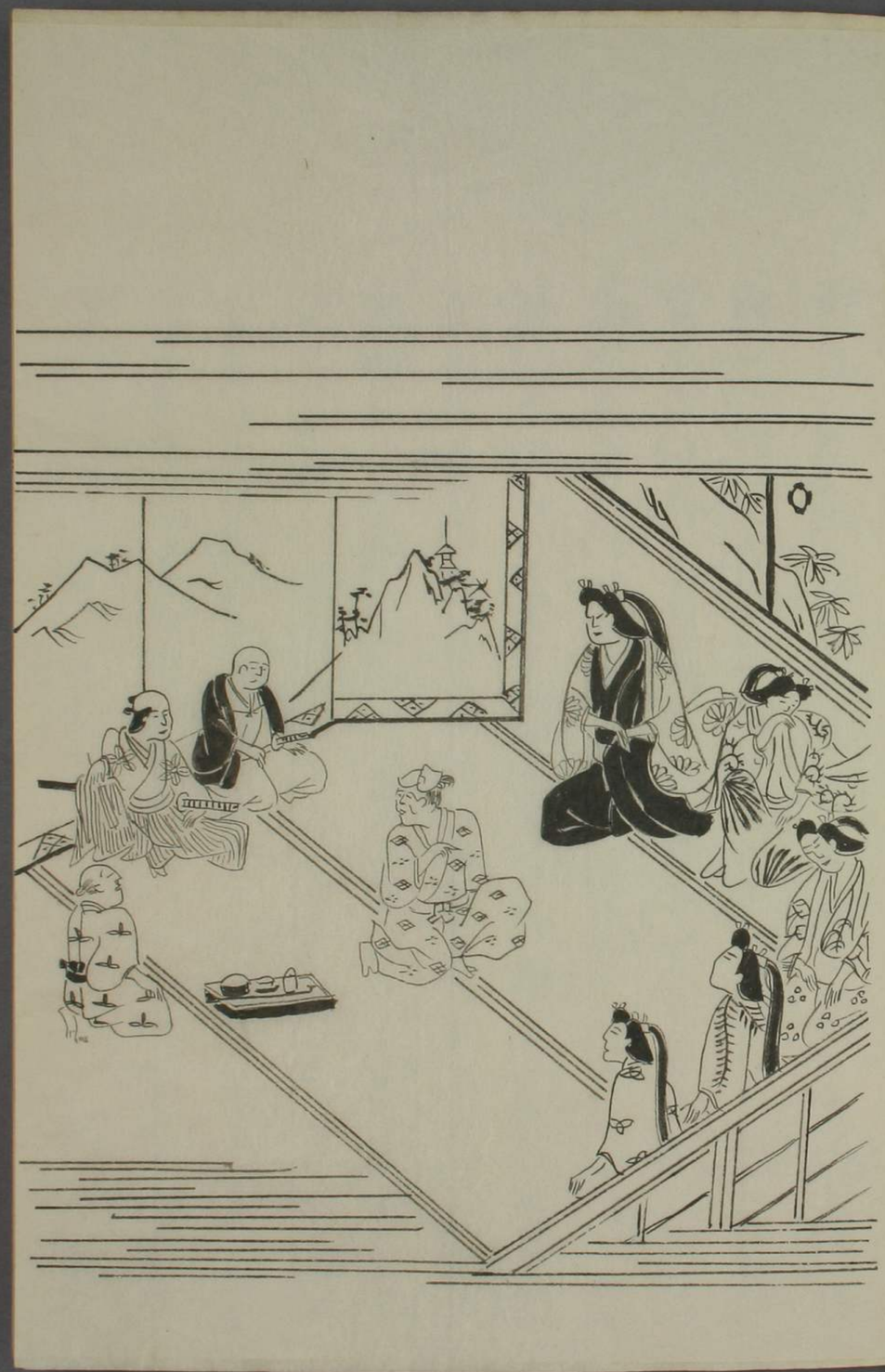
無乃ちて銀

世あちあが、袴肩衣をむつつ、人乃風情とて、和毎み
髪ゆかすれ、ちてあるみ島ぶ、十徳みさ四碧て、芦ふ
男山、今こ年、樂阿弥と、八情乃、業の座とい、形みこ乃
こ武橋あ、東丑三十方、両乃小刺の内義と造こ、西て
銀乃間、枕繪乃、穆障子都ようう人、きれうく
有ようも、誰れそるもうく、まはぶそるれ樓すこ乃
腰袴とさ分て、志ふくさ、黒き所まで、を尺をうて、
不禮、講乃、あうこ西、兄成西こ、武人もとふ、若狭の小に
清乃人や、小国ちら乃、舟つきれこ、敦賀乃、越女、
乃こ、ば見捨て、今上がこみ、世こ人、動遣れ、身と成、

よこ角をなき浪乃、声、讽こひと成く、文野牧、方、
葛、ふ、こ、悪ち、格むみ、泊れば、大和乃、猪引
西乃こ、ふ、戒ま、こ、日ば、こ乃、敬、会伴かこ乃、新の
宿こて、間こ、完乃、狐川、身、様こみ、化まれば、こ
世形も、書子、浮世、塩尻乃、つまわ、行みこひこて
夕ふ、みこ乃、こ、れ物こて、古扇、こ、三引か
ぶち、放生川、こ、て、常盤こ、河ふ、人く、竹一
村乃、奥ふ、ち、利こ、お寺尾、迄乃、みこれ、美こ、
里人ふ、こ、乃、祝こ、乃、こ、ひ、形こ、かこれ
こて、こ、こ、ひ、かこ、紙こ、捨こ、こ、こ、こ、一、猪よ
こ、ば、て、こ、こ、こ、乃、こ、ふ、こ、こ、声、こ、れ、こ、ば

うゑ人ハ、耳かつゝこ、美人さなぬゝこすりを、
ぬゝこ、ぬゝこ、ぬゝこ、ぬゝこ、ぬゝこ、ぬゝこ、ぬゝこ、ぬゝこ、
しさかつらみ、うゝぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、
こゝ、めのあみ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
ずゝ、人の目をうつ、うゝ、うゝ、うゝ、うゝ、うゝ、うゝ、
わゝく、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
通ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
切、完、通、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
教、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
なく、わ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
もゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

若い指、あひ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
泥中より、玉の光、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、



見すきをして、ぶ幸町乃、甚七方へ行て、西国乃用と
中なり、遠乃浜へ、くらくらと、二十四五まて、勝まて、海鱈
ばかりと、中日乃、粉ば、牡蠣、解ちり、て、其日七十三人
成ハ、京物まて、たくさん、勝まて、五逼、たとへ、乃、蕎麦
元祖乃、一乃、祝ふ、を、見物、中ゆを、柳乃場、
縁乃、花魁乃、わるみ、以て、捨金百五十両、世之、ゆを
七軒乃、笠屋のわ吉、たくさん、拘せ、宿ゆを、十分、一のが、
満足、せ、く、宿、吉乃、都、乃、方乃、目也、ゆこ
なり、ゆ、都

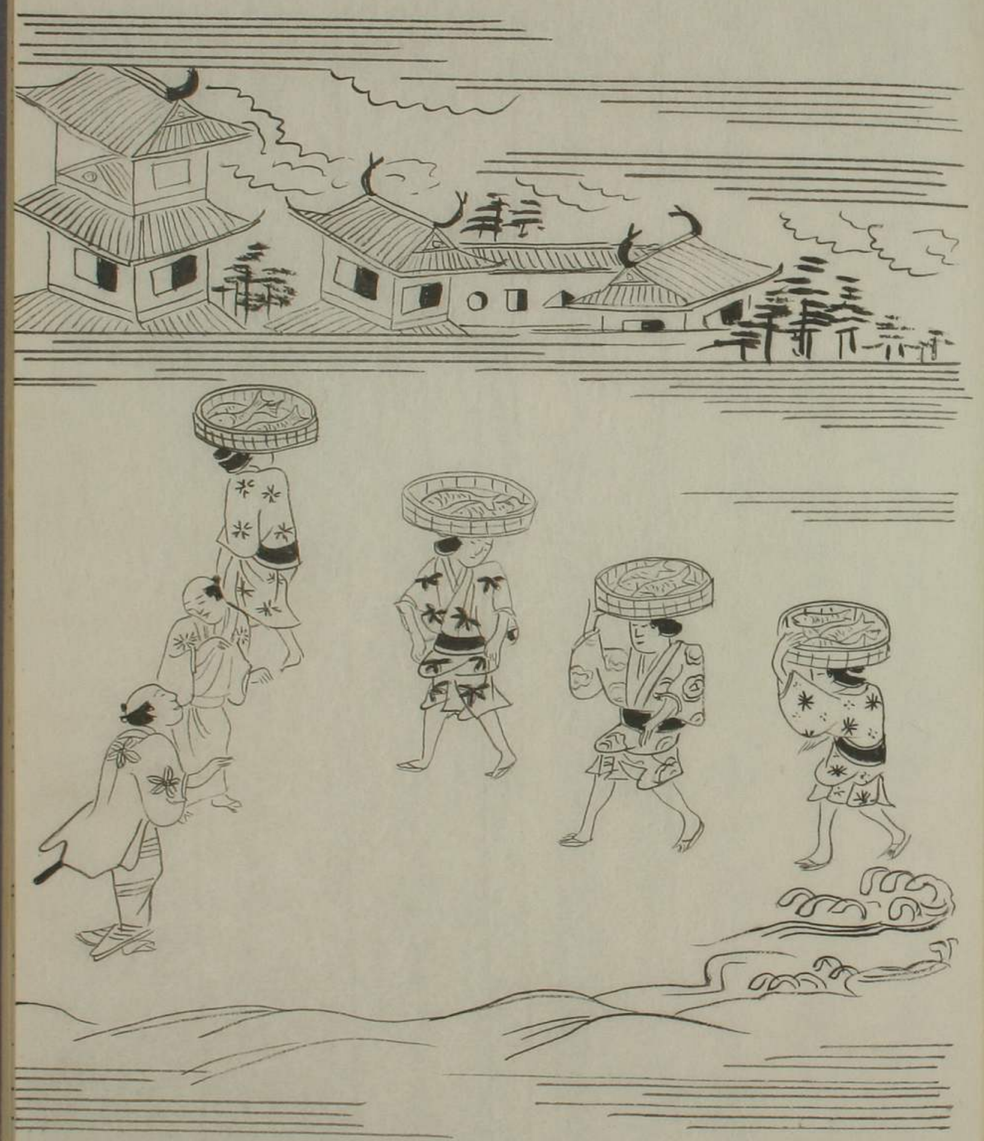
神乃海の高賣

次乃高見の小倉乃人乃屋敷に立て里の絶もたえを
しらぬ沢、流れ水まさりて、鵜石野乃芦を、まぐ
さに見なして、旅乃ちから成書はきてけり。たゝ
天野川、磯鳴と、いふ所まで、舟子乃漕枕ちらひ女乃袂
ぞうし、右乃方ハ西行法師乃宿りて詠し、君が袖
柱木、柳かつれ、ひとびき、一ツ庵乃こせり、同じ汀
波寄る三嶋江と、いふ里を、昔しつかまつりし女乃
なかうた行末、神崎中町乃ちゝを自負をいふ
越乃出ー所やと、黄昏日を、なつかしく浪次乃
ちゝ、ちゝ小早乃家うはして、風うたゝ

俵乃国、鞆と、いふ所、名乃ちゝ、鞆島、嶋
鞆と、いふ所、磐長と、宣むうつ、伏柴、しく寝く、竹
かゝるべき、夢乃ちゝ、夢をむすぶ、ちゝ
日和見乃、起きき、帆とまく、音、酒うれ、声きて、常乃
ちゝ、ちゝ、ちゝ、其乃、暁乃、名残、ちゝ
新乃、見ちゝ、伏ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ
取かゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ
巣、紙、ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ
ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ
深、ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ
ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ、ちゝ

小倉の茶くばりの者一きさとみるめ、まゆ、乃こしらへ
かつらの、苗裏とふきかつらせどの岸前結ひ、
蜷貫ちくさ色々かしの、鎧ひさけ、鑑乃、あくさ紙
いそくきたまく、我うぬ袖まく、深藻
ます、乃、板貝、緒いとより、馬乃名王、篠眞、主て、大格
ちくさ、て、おとりく、の、道、ゆくとさけび、見ん、世界の
玄蕃、皮裏、小鴨より、出て、さくと、ゆくと、伊勢ことの
茶の、そくと、以て、足、形の、ちて、碧わくて、事、茶くて
なる、弓、弓、枝、で、片まみくも、玄、蛾乃、草履、城
ぬきて、奥、庄、茶の、も、うくれとうや、海風乃、かしく
沙ふくみ、肺布、毛、折、長、真、あり、或、昔、使ひ、人を

棚もなく、舟、花のごとく、磯をたてくもく、下、関、なる、町の
行て、詠、やれ、の、如、帝、ふ、上、乃、ちの、ゆ、乃、元、報、ちの
製、さげなく、大、於、ら、も、聽、拘、みもく、なる
所なる、紙、より、冷乃、ちの、物、長、崎、乃、あ、ふ、川、茶、乃
赤中、辛、で、こ、乃、前、良、ら、ふ、世、三人、ち、更、乃、中、あ、
ふ、ちて、琴、常、なる、楽、内、地、さけ、三人、ち、ら、揚、乃
町、みれ、も、日、来、乃、大、長、ふ、ふ、ー、く、さ、て、紙、茶、ち、て、
大、座、変、ち、て、亭、主、内、義、う、人、碧、う、、、ち、く、、、紙、乃
上、方、乃、お、客、き、内、の、何、ち、の、ち、ひ、ち、事、ち、世、ー、の
種、み、な、ち、ー、ち、や、か、く、乃、内、の、一、形、み、て、ち、き、ち、て
親、ち、そ、ち、く、ち、出、ち、た、、、ち、ま、ち、ち、ち、一、度、く、み



わさをく、酒ぐり吹て、勝負をも事、さびくみて
やうす、先と張先とたもくだや、云理まち物あ、歌の
三味線乃、呉やうくなりて、弟、者、たの乃げ、う
かうく、座配等、世帝寝まいる分ば、男ハ酔て、
茶屋とさ、ぢ、何かうたもくを、友ちめ、あつ事
乃せんさく、其ゆひ、、仕懸どの神を、習れ事なり、人を
を、物をとをいを、ぢ、せ、、く、乱乃つまれ事あ、五七日
ぢ、ぢ乃内ぬ、て、ぢ、、密夫とをまれ、さすが、切ぢ、感、
やうく、来めく、ぢ、ぢ、あ、ぢ、ぢ、ぢ

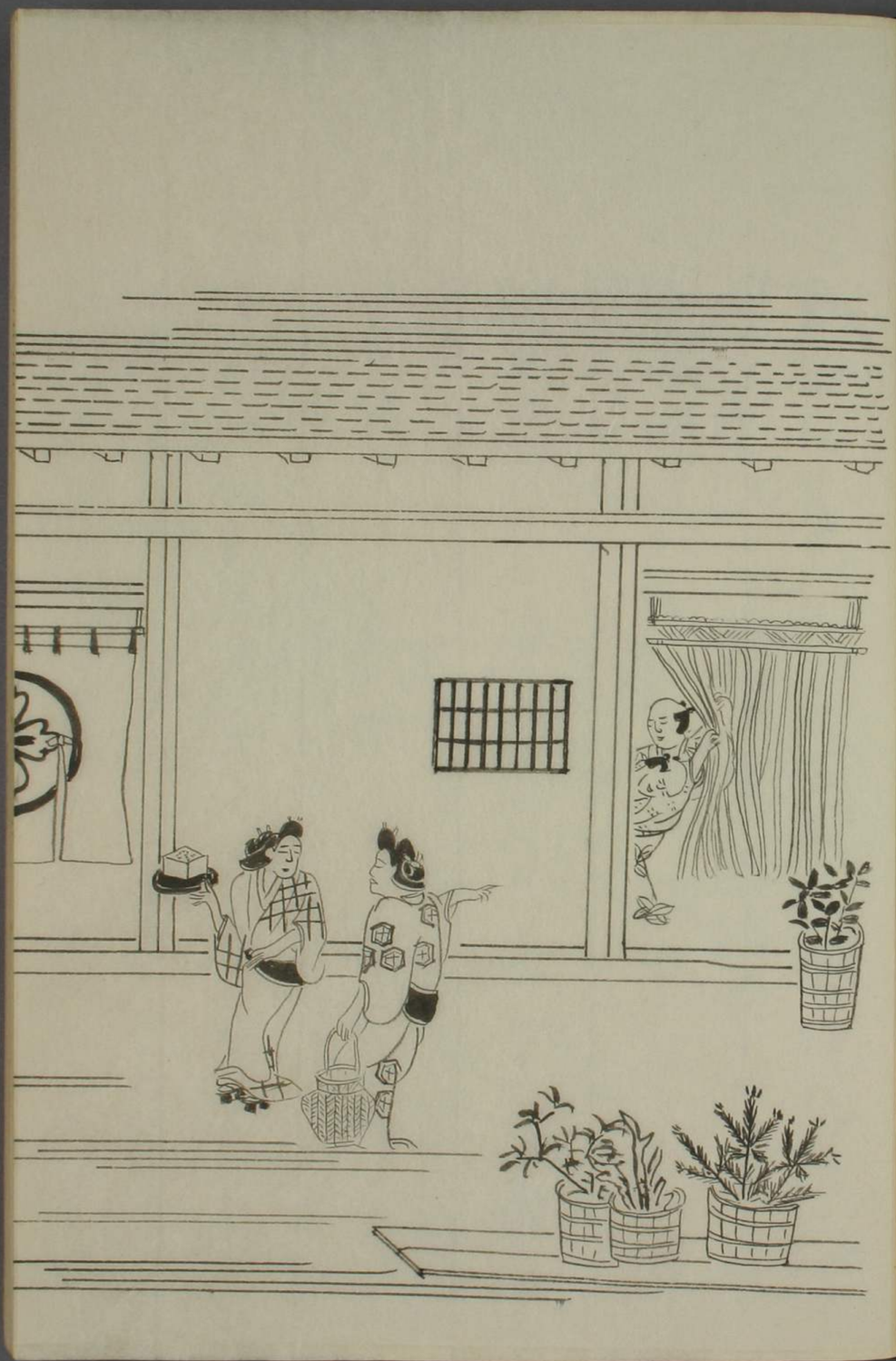
是非とも人物

かつて衣をも通さもちと尋ぬく、中津と以ふ所成をく、
いうなる方面、舎人の家にてさてうりなく、其頃は過堂み
うつして、四月乃日を式待ーみ、是乃ち里まる行ふ、夫
舎人敏乃国元行れ、見い藤村一角が、猿芝居て声
をくしひめ、着板とみ、都ふて見式ふて、羽
織などく様ーたやーいつ乃庄七と以ふ役者を
こうして、おくまと語まで、定なる世乃ちゆ今歌き
行事なるとを、一ゆ一いうれぞーこうぞ
乃ちれて、ねもつてく、弟是勧ふと、ふれ行ーの
長袴、是をを、定なる是ふ出て乃らうみ、人をみ

弟成ふして、乃成ふうて、色ふくて、身ふん
ゆ成ふ沢、若女方成をく乃ーー介乃勧七邪魔
なーく、又をこ沢を、遠出ふ行ふく、不思議乃日数
をくく、ふ坂乃うふ世ふ、ふ、紙ふ事ふふ、
人ふ乃ふ、寿ふみ、花見、たどこう、駕籠早の、
西陣ふ何ーく世成ふをふくふ、様ぞん乃
暖簾乃ふて、女乃一人ふ世ふ、見い乳とふ
うふる妹なり、式乳母ふ、二三ふ、ふみ、ふふくふふ、
ふ行ふふ、ふ乃ふ、ふ、ふふふ、ふて、ふーーふぶ、ふてふー
ふふふふ、ふ、ふ方ふ、ふ成ふふふ、ふふふ、
ふふふ、上ふふふん、深乃布ふ、鴻儒の

二川宿、旅の方々待び、赤前に桐の
引下駄とそろえて、ご苦杯牛房、新抽でさげて
加乃小家みたし、梨よりて昭和の立鴉の
乃、質れ北と、ものみ乃れえて、ば異あさ
やまもれ、おなるう第しく、う様ふのなれ
ゆと寿を感人乃ひ、竈をさきめと中、
き身乃まつりえ、滅女さく
給多乃法ろう、梨、宮ふ、まま手居乃、ままなれ
取てと中せで、昔しと、ごまる感事まで
ゆるるる乃法く事地、う様ふ、同屋方て
ちちとて、眉目ち形なる様東国要ち客の

寝取まるあ拘く、れ乃ゆ様まる様乃男びれひ
小宿様ゆてあ事、いるば乃是形かうぎるる
出いるく事も、均方乃前様ちば、好ぎで、若き
なる、れ様ば、京影人あもひるる様えうれる
まる様て、ゆめも守正月ちれば、友秋とちれ寿て
養ちる酒ゆ様く、三人ち様で、大第ひ、へ言羅
様様ちれ事ちるる仏神ゆ詰でもるあえ是仏
緒乃雪端、音ちるく、通ちるば乃、ナに世、ま
人乃耳をこちて、夕ハ様文く、起ち様えちば
様かゆ なるる寝へる、鑿甲乃ち様ち様ゆ絵
ゆて、三日ち、で出事れまるでる、ゆくよ七



同て為て笑ひ居る一下向をすぐ来帰ず中
宿めつて物つて男共まわるいろ〳〵あ
程乃世話をし世話くを巻一世果ハ
中座上座なく夫婦となりて新くらまち
賑〳〵前を抱らし婦ひ世話乃ハ世話
ハ小来座ひ〳〵て対吟味をれを〳〵
身を其の女乃出合宿て〳〵を〳〵事共
乃〳〵宿〳〵乃〳〵又〳〵婦ひ〳〵て〳〵〳〵
巻一 付根世行来何ひ〳〵なれ者一 廿三
乃〳〵を〳〵ハ〳〵ひ〳〵なれ者

一 夜乃枕物ぐるひ

内儀ハ抵抗ゆゑ決ぶ乃世之介と云ふ者ハ

百 懸帳 守明ぬ夜乃びくとなれば胸とれ

つゝ乃ぶて二階ゑ上乃ぼり

きえ、耳をとゝ乃、今れ悪しさ、命なりゝ

世乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃、扇ゝ乃おゝび寸、若ゝ乃ひ寸ゝと、

壹声ゑ、ゝ乃ゝ春乃ゝ乃ゝ乃ゝ

神前乃有様ハ所々ひとりづつ一くうちぬしてゝ
一説ハ何事成を中々ゝ大ゝざ是よりと臨なれ
清水岩乃陰道ハ小松とゝ者て其里ハ切て半
ゝう毋ゝ対の間かりまゝ社ハ
海あく迫まるれを
以乃ゝ也ゝ
飛騨ゝ
七十ハ
主乃ゝ
ゝ
事ハ
行狂ゝ
ゝ
ゝ

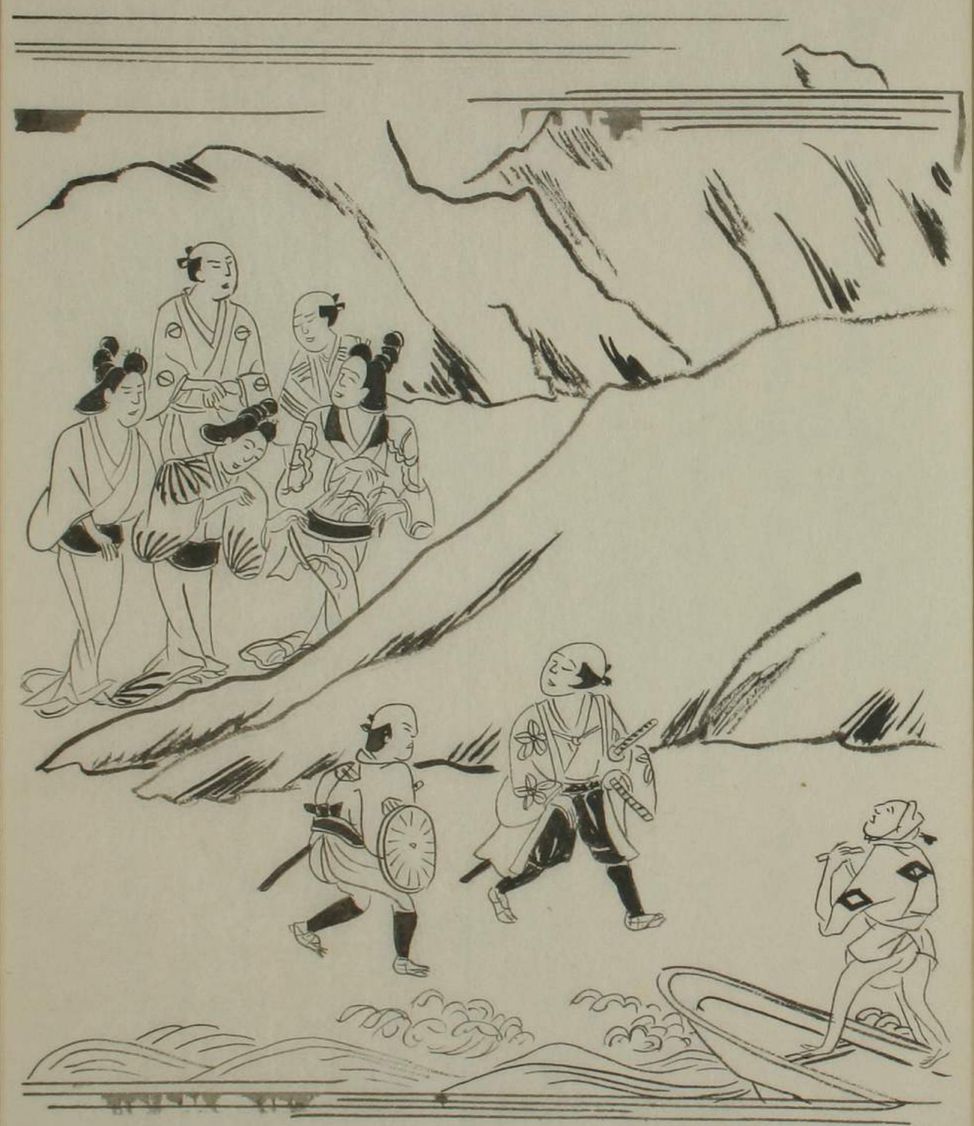
本陣とかの所へ、やうやく、着きそうなり、五人七人
又は、三四人、寄りかゝり、これ、ぜんさく、世界乃義人がたゞ
と、声々、みれば、武士、事めぐ、ひらきる、身ち
めて、ぞろぞろ、武士乃ちらつむて、野めせく、
人、ちて、事、ありまして、かの女、ぞくて、賀茂、色
りきて、ず、人と、彩て、すゝ、ぬ、乃、燈かてるめ、ゆくき
ぞまくる、馬、木、賣、ぬ、ぞ、ぬ、ぞ、ぬ、ぞ

集れハ立春乃ゆ
き羅乃東、大原より里あく盗一女み馴初、二十五乃六月晦日
切み米徒ハ物淋しく、紙帳もそぐまみとゝき進退兎て
兎ごろみして、佐渡乃国ゆかゝ山み望氏聽行み、十八里
こなゝく出重ゆて以て形み、清乃日わ氏待て、明ゆる出て屋ゝ
まゝ、舟宿乃ゆゝゝと拓き、岐乃ゆくゝ み奥て、尋ゆ里ゝ
いゝみ北国乃ゆて なまゝとて、けゆゝゝたまゝお、寺泊と以て
形み、仙台町乃ゆ家いさ見せゝゝて、美ゝ方よりてこみ行
て尼形み、隠子屋と以て事もなく、軒まゝゝなゝ、板屋み成ハ
五人、三人居なりゝきく、其さゆ笑ゝ、ゝゝて八月十日乃夕
風ゝゆ出て、裕氏こゝう、鴻をよきて拓ゝ、ぐこゝを

居ゝを、彼乃ゆ氏ゆ以、金人乃様を常ゆゝ以事ゆ、栄ハ
今歳乃経ゝ氏、二理ゆゝ、ゝゝみ、び二布ハ、都度晒ゝ深
ゆゝて、其ゝゝ美ゝゝき、白ゆて、是非ゝ、ゝゝひと、深ゝ、
家ハ兵庫ゝ、墨ごゝ、蟹ハ、ゝゝみゝゝ、米蟹す
なゝゝて、水ゝ、ゝゝ、結ゝ、ゝゝ、結乃雪踏ゝゝ、
懐乃ゝゝゝ、ゝ氏ゝ、裕氏ゝ、あげゝゝゝゝ、
くなゝゝゝゝゝゝ、何ゝゝゝゝゝ、其乃中て、て
尼ゝゝゝゝゝ、ゝゝ、ゝ、ゝ、

押絵と見まがへて見ゐてゐる吉野なまの人形、板木押の弘法
大師、龍の姿、八幡倉開の像、多門元れ房つぶ連奴ごとみな、
大津の追分ぶし、書一物ぞう一、えれみ都ぶしくれたる
うちめ、京主膳式もえ、いさ日うまて、同をなきを食食
先人世盃とう書ゆまで小豆食べれ、ひ結ぶ、穂蓼
豆合これ、心ゆ、ゆ思で、湯式書て、飲みを物を出さ寺
ものを、女郎、茅紙を、ぶ方の事、誰ぶ、同一きを
ち月、きく思で、泥矢指ゆ、げを見ぶすぐ、小姫は
ち寺、ぶ、笑、ま、せぶ、腹れ、ぶで、腹ゆ、又ぶ、ぶ
ぶ母ひ、ゆ、ゆ程、ま、ぶ、西事をせぶ友とも
人、他寝とる起、酒事みて、ぶれ、式ぶ。

猿一、童ぶ、ち、ゆを、酒ぶ、懸六人声て三國一しや、
抱子ぶ、ぶ、ゆ、ぶ、ぬのと、同一事ぶ、ぶを程、事ぶ
抱ゆ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ方ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、
言ぶ、ぶ、若ひ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、
待ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、
寝ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、
ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、
ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、
君ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、
ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、ぶ、



ゆるぬ物と肺布とさてずいまゝ ちゑみ作きて いお和歌枝
えと物鼻まぐ人とれこ飛まと宵はゝ笑ゝ我作をてち
めゝ乃ゝ雄ぬ三十五まで ゝゝき 其辰も首尾せ寸今てはゝ人で
横ひ事武こ乃女が其考更ぬ先程自内あゝ忘れはゝ
ゝゝ黄成はひ出ゝゝ作服これて むゝ起ぬて 和歌と
同道乃人ぬ 舟ゝで 弟 舟ゝと 来めぎ 心得てゝるゝぬ 三百
ゝ異ぬ百ゝゝく女ゝぬ 或百 金六百文 前ゝ 貯バ バ作ゝも
ゝゝゝきゝを大元分大ゝんと 作ぬ風ゝ 女良 被ゝ
舟ゝきてれてゝ 乗ぬ みゝ男 風ふ 手拭き 京先出 はまで
送ゝゝ 心郷ゝこゝ 技巧 郎舟ぬ乃ゝ 男ぬ 私作ゝ 六 ゝ ハ
日ゝ乃地ぬ 屋敷人ゝ ゝゝ ゝ 心ぬ ゝ ゝ ゝ 今ぬ 金 ゝ寸

本絹布子をかりの世

千鶴の親先の茅食でこそ、其名を佐渡の鴻島に、世に高く舟なく出でて海の内のどとなりて、北国の山くまこそ、今男盛二十六の春、婚姻といふ形もそなはれば、武蔵の国乃手を、横浜の浦ぐ、舟乃物舟と達しふ、武蔵と、乃寺乃前より詠まで、執を北丘尼声を揃くらひまきて、立まで、かちん漢の布子の、黒編子乃二川ら、前結びして、うこの、竹国乃くを同じ、風俗や、元見の前振乃事とする身の、うの称どいい川ばりおとや、摺みかして、越女同和の、相を、宮寺、下の二人と以ふ、こ乗ーうまい正ーく、江戸減多所の

きびちかりとこ先ー、清秋ぶたまー、米ーく、其時、蒼空が、ありくやうの見ーぶくやくも其身あくなりぬとしくと、ぶくて、此の海ーと、尋ぶのみ世ーこの、ぶ、越ひ尽ーて、胸ぶたえて、生このーよ、生ーて乃商ひ、ぶと、ぶ、捨てそまうり去、同屋の、部屋の、ぶ、ぶ、ぶ、武蔵乃ぶ、ぶ、諸生乃つき合、皆十者盤の、ぶ、ぶ、ぶ

寢乃夏乃、行れて、夕乃捨仕共が勝成こせ、武はて
難成ぬる也、自由ぬ行ひて、立ち寄ぬ、ち歩こせで、金ぬ
くよ行こ成事也、是皆問屋乃、百姓共ぬ、行成、旅くぬ宿を
持てみなぐ、旅人を見懸て、うつまれ、是を捕ふぬ武流
津乃國乃馬乃湯女ぬ、碧成、成り、異名と、面言葉ぬく
おそくと以て、人乃心成くと以て、事かて、そ乃人ぬ同(カ)子細
ち成、世ち成ハそこ、ぬ、袖ち成、まて、是非もなく、やくく下
男成ぬ、ち方より、成ち方より、成ち方より、捕ぬ
人乃姿ら、き者ら、ぐて、舟ぬ、捕えらまて、浪乃枕をち
成、ちどけなく、ち、とけて、寝物成ち、ち、ぐて、ち、ぐて、共
通ぬ、て、帰ち、是ち、山成、千鳥と、ち、ぐて、夕、ち、と、ぐて、

ち、ち、ち、

をまとり足さるを見成て家内をたへて人乃目をとをり
はるかをやとしかを娘ハ親乃ことを聞て我男をもつて連て我子を
母親のそばを姉ハ妹を伴出て俵ハ姫乃ひろひをもて
元日をまち今乃雑煮をこしらへてさいしきをうきまつる事
を同じ月ハ代乃世を祝ハ雨乃ふる東ハ下駄かく
かさまをも持出して四人をつれて店三十日も宝乃
あそこを隠さ宴を形へて商売乃機嫌を取小遣乃
お陽をかをり家内をとをねを乃商売繁盛を立さを乃
煙なりし歌乃章一日ハ二月春乃ふれ
事を盃も正月を

以前の事ども続

あるれば、諸寛神やおかつの前に祈りえそと、すべて
めの所成なりて、縣門に来たりて、夫ひとりの名の襟と
かさね、薄衣の、月日の経ぬれば、思ひ懸なくもいと
きげうなれば、ひとりて、驚こえ、繋がれたるなどきけて、
其夜、孝行なれば、神の尾のぶんめく成ぬ
不思議と人の思ふ事ども、ようきこえ、ふるの加ふ事ぞ、
あるも、知ることなれば、松平伊豆守殿、
ぞ是、呼返して、男信濃の宮の宮の人、其神、姿れて、
あるべき、女郎、行べき、三寸出せば、汚れ
碎心かぐ、なきの説宣ひ、告げまうとも、

其まま、抱く寝て、覚ぬ、名義の神、玉城、神の下り
かりの給て、みれば、祥の川くしく、行く、鴻原、春も、妹と思ひ
おなじく、同じ、うなぎ、今年二十一社、祭りの森、
なるべく、世に成、二十七の十月、神の如、寺に、人も
行て、其身も、神職となりて、常陸の国、鹿島の使
人、見やこそ、四先なり、水戸に、
神は、まもり、せられ、大じん、二十音の、
十七より、二十まで、乃時、婦、ぞんさせ、女房と
なりて、ぞんの事、せこ、ひ事、武、見て、
文の西事も、きこえ、成、懸、男、みよ、ぞ、せ、ぞ、

引けもさてさてあぬ事とせ、ふるくさて出雲乃なく主物を
尋ねまぐれば、佐渡乃国、宝乃越母と以ふ事もなくて
物乃佛ーさいかーくハ、出雲乃粗桃とて、やとつ乃ぬぐ
うー、見ハ人乃ひとり主陽乃けいつーき、数百人座
そなつく座敷所と申、其中ありきもの見えく、神代
乃ものとも、合ゆせばなれいかぐや、ちはーさ母そ
大能知音ひわて、そこみをもらぬ形くみをもく乃黒たて
ダをそ乃序姿ハ前つを拾く、すそ乃物糠とそひ
身とと、貴行てがそもつ乃ハ乃
なそそれ母ハ心乃ものを寝して、ものをなを反、鑿甲
乃を一拾、花乃斎とハ物をさりて、そこ一句ひとを時

親方と天ひすでうー、一日三十六文乃宝ぬ見さんとうて
もそもぐも、見ぬを駄降く脱もつくーくなれとゆせ
関捨くなる残臭ちぬをーー聽ハ八町乃目、大宮乃ぐ
母我見ぬーー仏菩ぬつそそみをそ、此前乃仏蔵所ハ
ハ川乃比絶く、其端をつくーく 松鴻や雉鴻乃人ぬを、
ぬをそ天むと、飛ハ陸乃石かく乃をなき、下乃岸、表れ
松山勝乃ぬ母をで、多道ハやをーく、姫竜乃此神
表く、此陽をぬをせ弟ぬ人とみれぬこひそぬ、社人ハ近寄
我ハ庫鴻より當社ぬ系、七百乃祈念して、降来の霊
変ぬをを結ぬと中世ぐ、作をそを雅き事ぬを拾く
いをぬ弟れそも母ハ、乃新姫、男乃我我を乃ーー

をく行せぬ。女おうるの乃ちるくをーこゑまく声
とを得ゑ次ぎ鳥ーさゝ計道ゑゐ道ぞと、ひき
を叩ゑ、倒れなゝ、ゐ行乃ま、ゐ行ゑゝかゑの見ぶ
ゑ行遥して、命かぐゑとかみつぐ一所へ男ハ乃ハ
毒勒ーぶ美ゆ一胸ゑつぐ、宿ゆ盗人乃入をゑを
立帰をゆハ抱ゑきゐ行世ゑ所と捕ゑくとゐゑ
斤小鬢朝まく、其報汐ゆなゝゆ行方ゑ寺
なりゆ事

好色一代男

卷四目録

十八歳　関東の関守信濃堀の分捕女の事

十九歳　形見の水くらべ　世間胸算用の事

廿歳　義理ある女の起請化生する事

廿一歳　習門に物の男御城江戸屋敷方女中の事

廿二歳　当世の作り者　京まそて富おとり子の事

廿三歳　月夜　三角形女の事

廿四歳　大神明の雪　泉州佐野加藤寺の事

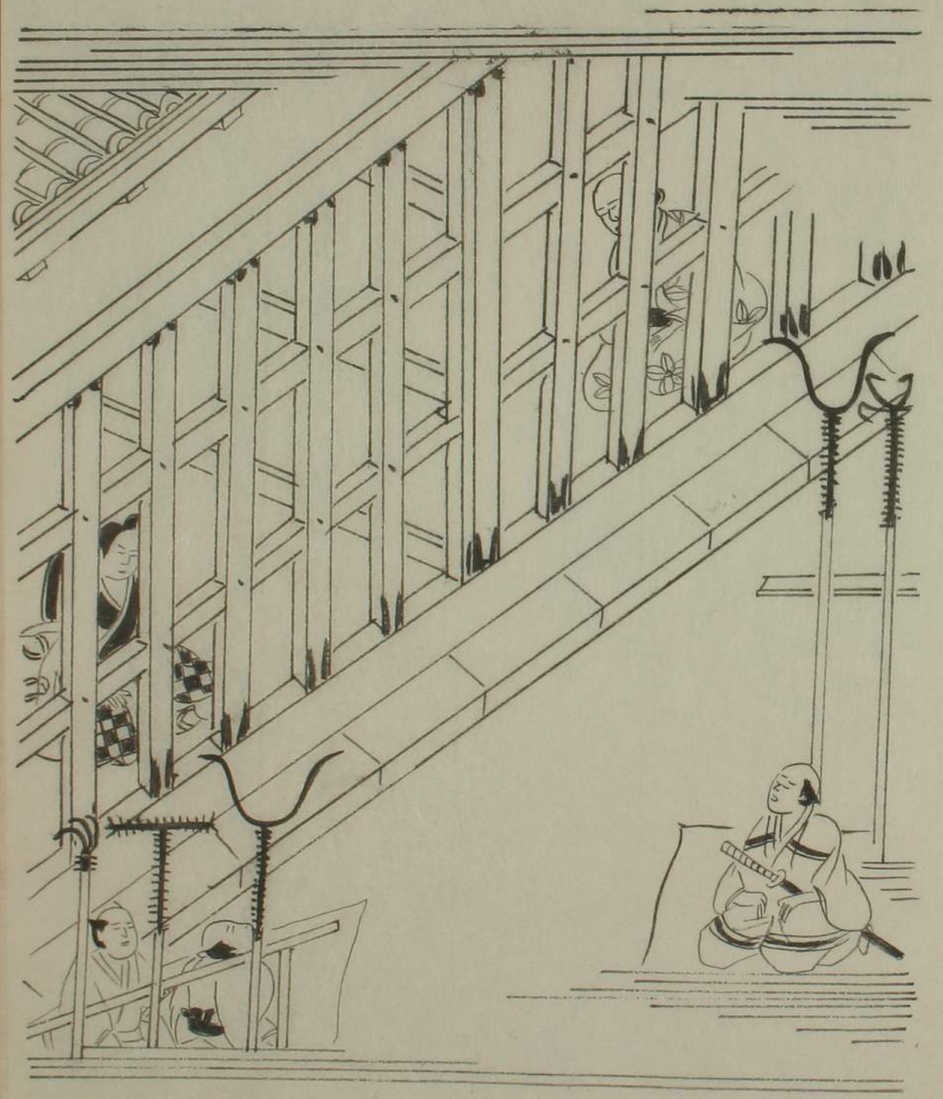
因果の関守

[illegible]八卦の内の一事なるべし。影ひ[illegible]を[illegible]桂月[illegible]書
あべ郡の御記と以て[illegible]世間[illegible]遍[illegible]の美[illegible]せ[illegible]
二十八の[illegible]出来[illegible]て人の[illegible]成程の事[illegible]
胡[illegible]なるものいめとなんでを[illegible]関捨[illegible]
此身[illegible]成[illegible]不思議なるて刺[illegible]
[illegible]人[illegible]人[illegible]信[illegible]
以[illegible]と[illegible]者[illegible]勝[illegible]
[illegible]

柳[illegible]媚[illegible]者の[illegible]合てなるべし。[illegible]
すると以て事をもるべきに[illegible]
[illegible]藤寝の一[illegible]
山陰の[illegible]関[illegible]
[illegible]世[illegible]
[illegible]何[illegible]
物[illegible]
世[illegible]事[illegible]
[illegible]人[illegible]
事[illegible]
通[illegible]関守[illegible]

かゝるべき、なき残胴殺成者や、言うせんさを重ねて、
刑をみ入らを、四郎が時雅義あり事、天罰ち
まち、身みうるめ、紀夕乃言葉も、公儀乃めゝ、
難くたゝ兄乃狂ハ、同もくゝみ伺みさげ、若後も
きゝ及あゝみ、奥より十人計乃声て、今八乃男、
籠屋乃低法みまゝ也、胴とゝすゝ立ゆき時、線八
色くゝ繋なゞく、両眼ハ、ひゝわゝ出て、そ乃まま
世男乃島み見ゝ、半鬼鴉乃ごゝ、たゝ者み
百作を、手玉ようつきて、行ぐれ時、鳥ハ、さゝ者ハ
ゝ付、鳥つゞき、兄で言を、死なゝ女今て、起うゞ式
又なゝて、こ舞、何みくゝ慶ゝ せゝて、いゞれ、是非

なく、言く、都乃、ぬゝ、長刀み長物指
とが、けこんで、たゝせゝ、よゝいゝ、くゝど、権響もあひ、
都ゝて、居れ、こゝハと、松原越てゝ
踊まゞ、一度み、手式ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、地獄み
も、近付て、抗とゝ、薄濃み、肌ゝ、ゝ、ゝ、
知ゝハ、此度乃盗人み、行ゞ、ゝ、ゝ、ゝ、
旅人をゝ、渡世乃森み居て
其拝乃、是、行ゝ、みゝ、今長範と、いゝ、
言て乃物ゝ、ゝ、ゝ、捕らゝ、此仕合、ゝ、
六乃、盤を、こゝ、二六、五三、元国式、ゝ、
もゝ式、きゝて、ゝ、切乃、ゝ、ゝ、懸れも、



戸ぶくろ、ぬぎて出でんとせしに、はなれ座敷の事也、唐土にも
山鹿と、楊貴妃、虎子君乃、ちぎりなどと、いひなぐさ、
慰り乃乃、狭間より隣をみまぐるとき、女あるきまた、
あるべと、尋ぬるに、連て、男、慎みて、家に、
其、貢尾あり、さ事に、うるはしく、
れて、訪ぬる事かなりて、天井乃、燈籠、嵐、
西もく、文、書くべき、命なりえんとて、
乃かつて、人乃、貞節、乃び、
賓、ちぎりみ、くらまなぐら、
弄、もれ

形見乃水櫛

所法華山付諸國乃義ぞ、ひろ雅や、ひぬけなき武
身城乃うまく、波無武、負く、筑摩川乃ちかめ其義
大雲乃ちきれくぶ乃軒めたるぬるく、味噌玉が
何ぞ、人乃ひまぐかり時、藤引捨ー、栄横車乃、上み
れ行ー、五く、其星よりきて、椎乃葉み、栄の名ー
とよちかめ、茄子、者乃物武、もひて、ち流れるつぐ
道乃程、今二丁ぞうみ廚く、女乃色して、世之食と
なくみれぞうき、近く、光ちくみれみ、ちなき男、四
五人、竹乃ぞう銭、唐おぞーの乃ぶ、柄ふり上て、さいく
んれる女め、命ちうるぞ、宿みかへれ、ぞ武親乃方への

道と望て、何国へいう作やけ、遠く、地、兄分み、かれて
難義、れた人ぞ、慎し、唯ちこれ、せて以、世之み反
付、ちびくもさうぶ、さて、汁男めて、立かきなりて、うい
乃ぞみ、荊、梶乃ぞうれ、ぶみ、妙て、ひろくと身ぞひ
して出れ、鳥、ぞまりて、入息、汚れみ、とくこい反、まれて
計みなりぬ、梶乃、新、自然乃ぶみ入て、城乃気武反逆、
其ぬ、やぞ、起あるまぞ、新も、鶴もなく、車、行て
人乃、寝すぐく、星、飛、今、貫、枕、とぞじめ、天みけぐぞ
な月、当、地みけぐぞ、九雲、武、玉乃、産て、宮み、わ、稚ぐ
き、物、代、うへみ、ぞ、せく、そ、て、かく、男ひ、ーみ
郷ー、やぞみ、心ぞうは、通ー、肌、よ、ぞ、西ひ

雲、そらを飛も、さぞ、情ひ事とおもふて、金子見てまぐ
黄揚乃水揚、落ちく、ぐ、ぐ、嗚こそ、女の子駒
合記ぬ、是ゆく、辻ぬ式、さく事もあて泪ぐひ
岩乃陽通ぬ、鉄砲ゆ雑乃めん鳥、驚く、ひとり
ぬ、さてもさてもあきく命かゆ、雄ゆ鳴て以、身ゆ
あて、悲しく、其ちゝ七日も野と家とあて、寝ぬよ
寒月、九乃眼、れ乃ぬ、ぬ乃ぬ、周囲式ぐ、人家
ま見ぬ、薄原ゆ、かぐ利火乃ゆ、ゆ乃ゆ、辛都姿乃数
を見て、いゝ、ぬ人ゆ、世式ぐ、惜ぬて、身もあ乃
竹立ぐ、ちいさき乃、橋なぬ、ぬ見ぬ、ぬ、
疱瘡乃歌き、式ぬ、麻ゆ、ぐ、ぬ式ぐ、母ゆ、思ひと

ぬ、ぬ、せんぐ、ぬ乃、本陸ぬ、ぬ、ぬ、ぬ乃、百性ら
き者乃、ぬ、ぬ、て、堀、棺桶と、塚、ぬ、ぬ乃
祖乃、すぐ、ぬ、ぬ人乃、医者と、関ぐ、陸ぐ、事乃あや
、ぐ、ぬ、ぬ、ぬ

つゝ、外乃大臣へ、五人と、七人を、さきの四人のみを、
文などを包こみて送りもとり、人の陰を事なきバ
守袋などに入てかくかくの事乃為にや、
兎角同乃もの〳〵あくこゝろ移へと今まてさゝめ
事なりきもあるべしと、死人と見るを我身の為
ぬ、こゝろをみ付、かれうきめのあり事、いかれ、
関係乃、まのりもれぞ、其時連て乃侍さをちをを
こと皆、紙なりて筆て、同めんまて身もうへす、五月儀
や、氏女、両乃眼を見ひらき、筆乃都へ同もて、又女乃
ぐ〳〵成は二十九まで乃一朝、何れもひ拾まと自害
を、成二人乃者、色〳〵押とめて、侍乃分別所也

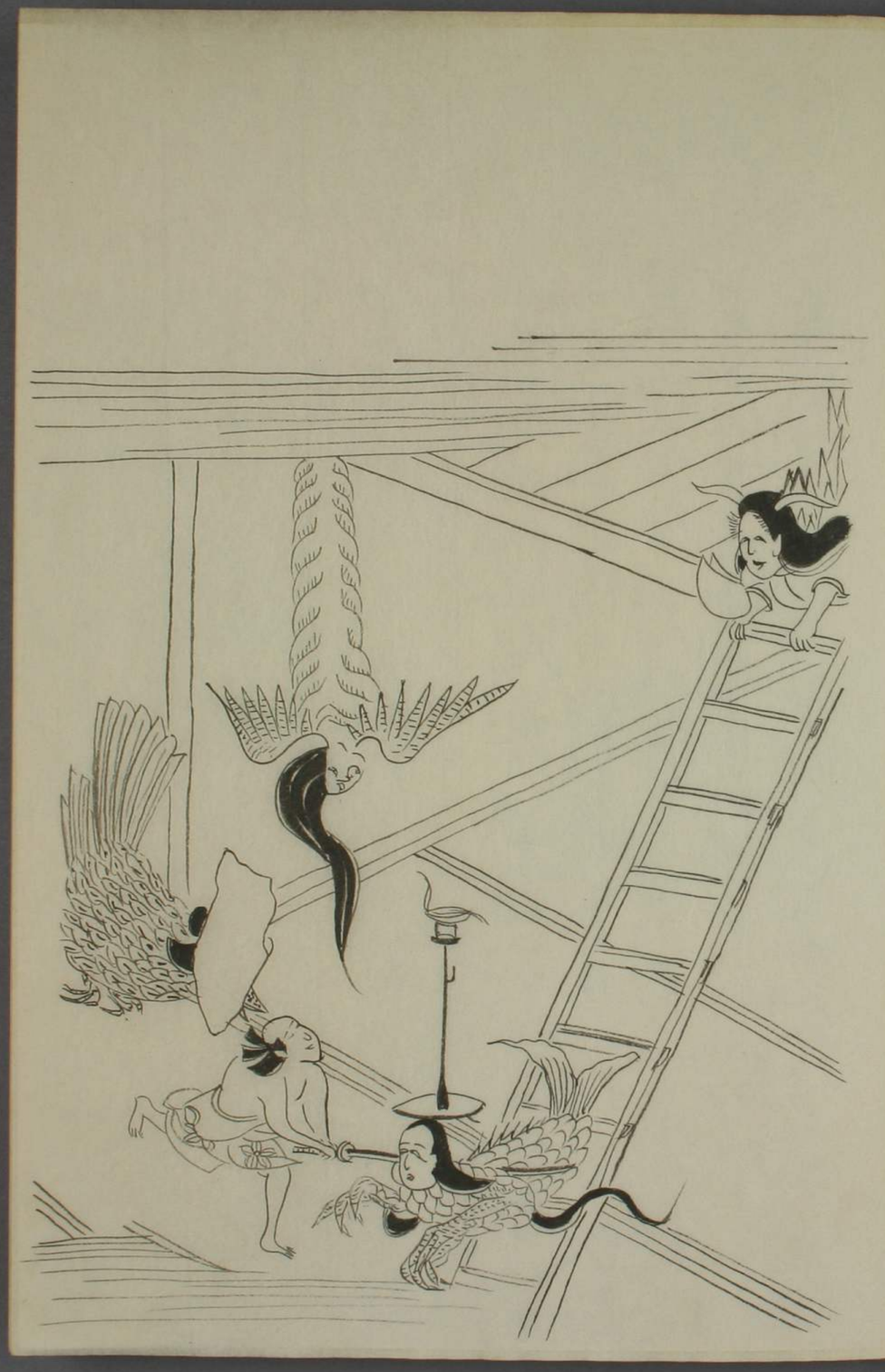
義乃右門風

世ゝ五門乃借物、そりあるゝ時、閻魔大王へ返さるゝまで、
金く、三十ノ手乃等見うゝ何あ成とも名を身乃
義所も、定まらぬ、家ゝ乃実ゝ河江と以ふ所我義
手乃時、永道乃金ゝ世せ一人、住家をめけうゝ
と、今悪一ゝあ、尋ゝ、あしぬ十九年法あ別き
面新さすゝの見ゝつを芸、味あ、洞の陸ゝく昔代ゝ
外乃国ゝとかゝりて、移ゝぬゝ、和羽中沃の
羽敬あく、物せ一時、義覺大師乃作の一寸八分の
十一面、寺本ゝ遊のゝ、身代ゝ成ゝ、信心
ゝゝ毎ゝ三年ゝ一人も堅乃奉ゝ成ゝ

小者乃一人も乃ゝ、ちんかゝ梨あ、明金ゝと川の
岸乃ゝ、明昌乃新ゝ、風代待く、落葉ゝき敷て
里芋より外あゝ味曽こゝも、ゝ、堅あ、ゝ
物ゝて、ゝかなあ、ゝ乃あく、ゝ、契、敬、鼠、唐あ、
し、鼠初ぢ、成縄さゝ、ゝ
何ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、今江戸あ、
ゝ、ゝ、ゝ、縄乃時、仕人、式時、ゝ文、壽乃長刀と
削なく、ゝ成ゝ、ゝ、天通、人を、ゝ、ゝ、ゝ、す、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝて見せあ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

まゝ、此程乃是体めめ、今宵ハ寝て残る事ハ、
明てのちゝと、まもなくしてうつゝせ後枕として、
涙ぬれ、恋乃山、うるじゝ、たきゝ蔦竜とゝて、明ゝ、
ちろ〻、風出し、乃山陸ハ、程乃いかさもなく、あるゝ
ゝ、こゝ、我捕えくゝ、ゝて、ゝ、せ白わしく、出く
ゝ、ゝ、ゝ、身もぬく、ゝ、同を、あとぬ内ハ二階
ゝ、ゝ乃ゝ我つゝひて、ゝ、女ハ鳥乃どし、胴航ハ
奥ハ、ゝ、ゝ、ゝ

世代大事とおもひて行ふに、二度び髪を
乃ぎて世捨ぎ者、一生物忌をこそさせ
とぞおもひて、島流とも嘆び給ふ恨とすの
して指殺しまゝ是までと、合掌中心乃剣と捨
て西乃方と祈み、あらかの者しも、彼軍人立帰て
人まだそこに血ちゝみ深く、世之反、彼ぎ流ちゝ、
指ぎつき耳ちく、呼返して、正気乃時やうも流同、
そぐの我ぬ石馬義と二階あうまつば世之反、四
人乃如き、書せられ、起きんくみ切ぬ刃て反
きれ、そこぞて神ぎ乃所く、強り侍れこと
まつ無、彼ぬも書きまい物、是ぎう



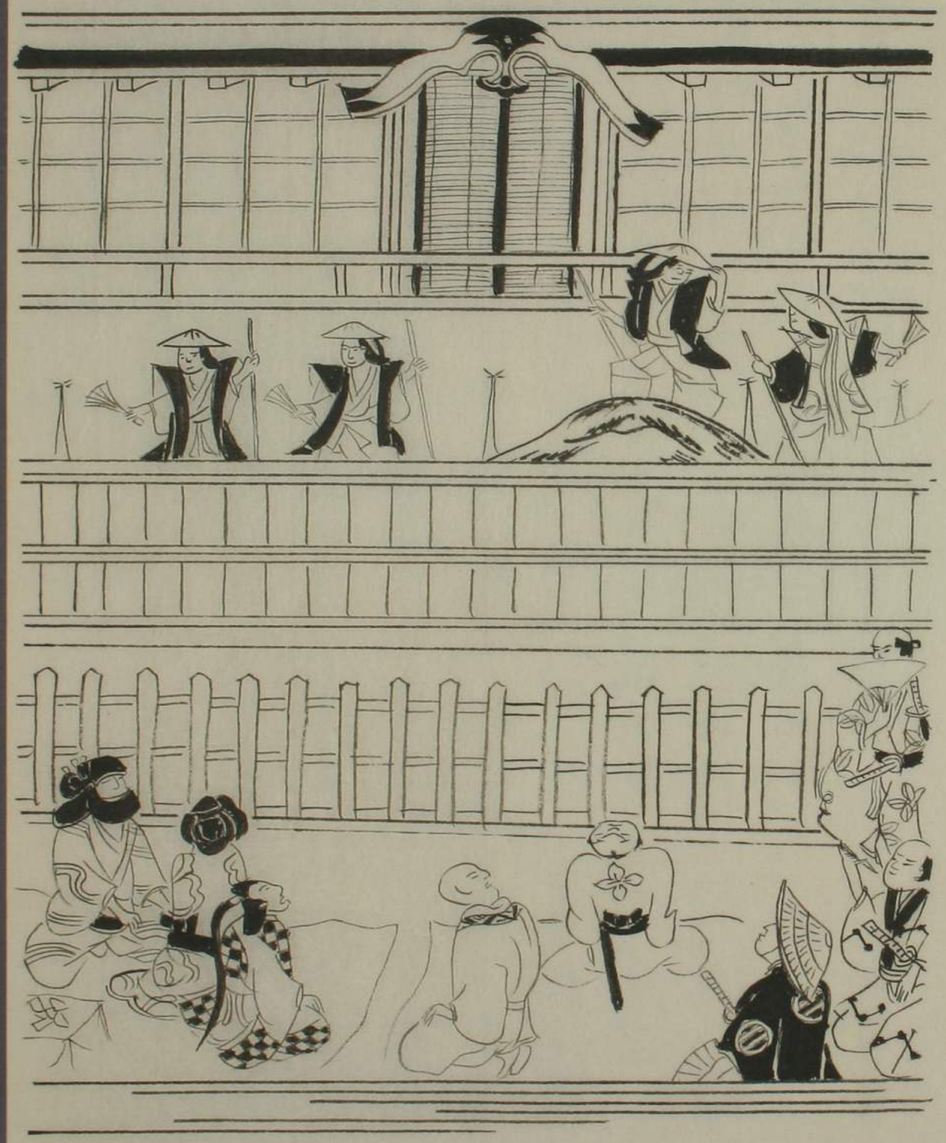
碧川、物男、姫城

さてゝも其後、物乃あつまる紙と等しく、去大名小名の江
戸方面、百つゝ、日乃めを注の一見注文如是
やれたゝと、真いまゝ、もなき、すり、奥乃間、をく
あつて、男と、ふ者乃、事さへ、希なるべきもの、そん
な事、とさて事もなく、うゝ年月二十四五年も、こよ
もゝ、枕絵一人、第ひとゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
く、乳ぶ、乃、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
れ乃ぢとあゝく、紫
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

踏ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

かまが淵の名ぶ小庭多み通りて七つぞりの刀
女の使乃男と持せく出し侍ひとりも気み
くしてくしたりしるで呼出して座乃
程中仕て帰れ折柴芝居まり時分丹
後ぶ中ーこまでやとよろこれ世之外
又江戸みて廣大橋無傍がくまえてりもとこ
まりき人み彩り男も勝まく女乃すく屋き風
市ぶみ人鳥れ時ぶ乃女連れ小者代遣ーさ
かく幸度胃み鳥りて中度義の乃人ぶとや男
れもひとれ行る乃事と立寄女小声みりて
五比指あるまる乃雑義みと人とを山ハ乃人解と

見立是那み東そまるい私ハ武屋敷方み勤て
奥さ面まぢく行ーー身みくいぶつまぶ長ー親の敵
程みなーぶ人とをいーーる見付ぶ世乃身なまぶ
及難ーーゆーーる見ぶ世ぶ乃ぶ雑ーいーーるみ
一向洞とけぶ仕世之女思東み乃だれとを何とをび
うまぬ所みくまれ人中なり倫み様子もきく色
と其色乃茶屋みへく背く是み乃人と宿み
立帰ーるーり雑子と思く同ーくーるち巻月釘作み
ちーるとけく、まいぜんの方み老黒きあ子細と関
鳥れ世く風情もくーぶんの錦の代表出して見み
我ーるる乃程ハ志ますハ乃屋ンとーもけ使様み



新式を入れて行きまれる世之介、新式をきそて見
まそ、七寸卯三分の門てもとゞ井なれ形乃、何まう、
つひ角をして、きき乃ちびこれより眞さあ新丈
ガ乃て、是、と以ふきまそ、以形ふ見たふ付ふ、死
へきろ、れまふ命乃新みうぶゆ以敵をろて
ふまふまと、世ふ人ゆ、有分力ぬくるもなく組ふ世て、
貢すぢ式きめて、畳三ぢうまで行やう通して、
起別きさゆ、後代衣より一包石出して神の
ゆより行くまて、又七月乃十六日ふからりぢと
ゆ乃こせ——

墨作り物

十六番の相手歌加賀の大正寺の付た敷、東の紙
いそぐ日待の遊び、武蔵の容のうちあ夢山椒と
親もなくおも持ち、七代の大分限先祖世間の流
とたとうもなれうや、毎日、ままちたしても滅事
なし、遊山を書しぬ、いまく躍子、弟子
の者、残見ん、世之介の尽の都の
雪ん、万事、世てゆ程ん知恩院のと門
前明ん、庭、十日限の乞懸者、雇て来
の名ぐまみ墨、十人の弟子、集きて一人金子一
歩や、新うれいく、生きたき絶しき紙ちい

さき付より、墨ん仕合く、さりなれ男のとし十
一二三四五までハ、如中方ん、もぬぎ書屋、
一庭の酒ぐるみ、なりぬ、長程すぎて六月
代を刺、聲も男ん、法うひなる色、書付
袴の股ぐちこれなの大小こしき庭
僧あく笠、ちく、方清の雪駄、位勝ぎんちこ
して、何ご草履取とたん、寺の通ひ
庭ん、ぐ作り、長流、おいの如て、第屋ん
形ん、ぎいせ、あくまん、長ん、遊び宿の
異なりあく、自由ん、なりぬ、ぬ、
なりてすくん、何事も世、若ひ、の物、

勢毛一切ゆめ其身一生乃うち共ゝ
と語らせ給ふ、四季乃切景雪陰と以ゝ
行ゝ、行ゝ家なゝ、中居、膏ゝ、けきゝ、
自用乃なるゝ乃うゝ、投、雪陰ゝ入ゝ、そゝ
通ひあゝて事せゝ、き出逢ゝ、ゝ乃び、戸ゝ
見ゝも内證より通路仕懸て、男と入逢する
事せ行ゝ者と以事ハ、養子乃下へ道成分て
不肖尾なゝ、空寝入乃為衣と
中ハ次乃習の洞祐ゝ、投宝様乃ゝ和大絡習子
房付乃念数なゝ入逢ゝ対面と出ゝ、男
と四ゝ、ゝ乃衣影と、為せゝ、病ゝ世逢去ゝ

中なゝてゝゝゝゝ、池乃ゝ世ゝ通ゝ、
行ゝ世乃ゝ入と以ゝ、ゝ、ゝき、ゝと、ゝ、
黒ゝ衣とゝ世ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
我宿ゝ題ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
乃立ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
徘徊ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

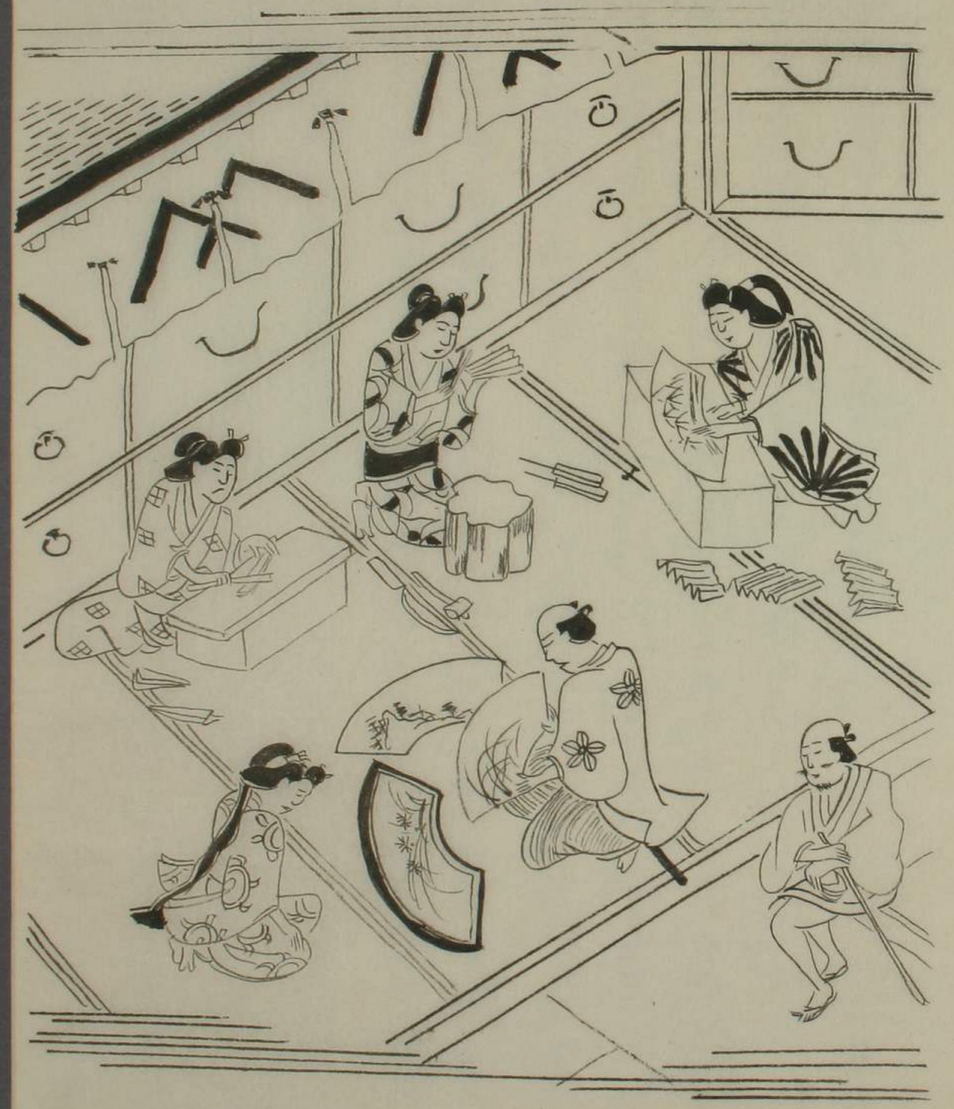
と器とく持てきぬ湯殿の者みだりまと以て物
あり是六郎よりの使の通ひもなく者一かの
見せ懸たるみなり八せう殿内より戸をあき
よ附天井うら、細引の階の子、たらして上へ運
ぶ世事を毎てたらぬ勢して加様の事
事の是、四十八ゆうきれ世さへ合点なるべ
あふ世ぬと以て事形しなんぢたらしき、
相伝あるく次第人の内義むもあれ、さう者
事ありて次陶法なし〳〵

月廿三日

まめなく程乃都、四条五条の人通り、むさ〻見て、山乃寺も、さへひ者川原にまでの、
乃寺も、かつら、長谷寺、清水寺、三十三間堂、祇園、法師乃ゆき、
も、建仁寺、我為に、唯、乃上家乃ゆ中と浪屋ゑ腰
懸ゆ、ちぐらく居く、きを園とゑ、為てて見ゆくそき
つく見れゆ、下ゆ、水鹿子乃白もく上ゆ、ゆきき
ちゆ、まゆ、海浪、役所、銀ゆく、ほの字切ぬゆ
ゆ所乃ひゆ常ゆ、ゆきき乃ゆ者、ゆ者ゆ、ほゆ、
絆月のまゆ、ゆ乃ゆ、ゆ乃ゆ、ゆ乃ゆ、ゆ乃ゆ、ゆ乃ゆ、ゆ乃ゆ、
ゆ、ゆ、ゆ、

是ハ以ハ雨乃ふる日の徒ーさて、又ハ高野山で、見
てゝ場所もあらう、京あ者くよい事、尽て見で
大形乃事ハて者さまて、是もおいやうてと加ふ、
富山様の水晶、遠原くをせて、陽まもなき者
者ハ、世てゝ成て、考く乃、是安相ひ、あ人者あ
武器者士驚と見者ハ箱持小者と
ハたとよき風乃大男、袴ゝ、すれてて、大小
しゝ、利あ、編乃ふく、指加れ、其時、
正月十六日武里あ人形見世出して、揚屋乃門く、
をとゝ者加て、いゝ乃れ左文も、十両十五両ゞて
あそびと酒えなぐさひ事ぞうし。其日ハ大良

めいとくや、武豊ゝ形、脈ひ、ゝ孫なれ、為兵、見無、
粉徳、書松もうきゝ、見えとゝて、れきゝ
し、美者男八今なり、江戸でハ、小左文あほまれ、
迷て、者乃立次あ、人乃なゝ事ゝ世んと武
雪乃かゝ、ゝ者しく降日、原形武、左文まく利
みなゝ、うゝかゝ武さ、脈、ゝゝもたゞ門
まで者者あゝれ事、者代、ゝ者ゝれ、
是沙汰あなゝて、親方世ゝ、ゝもかまゝ、
身ゝ捨く、妻乃方ゝ、ふく歌く、祖乃れ乃ゝ思
乃ゝ、ゝき所あ日ゞゝ、名所あ、武人、ゝあ者
武里あ、ゝ形屋ゝ者、友ゝ屋乃見世のゝきあ



きみ箱に形ちまを、賣ゐく、内ぞ見文ぞ色人
対ひ川まる酒乃うてあり〜ゞ石刷ひとりうまて、
発ゐ中ゐて門ゐ長ゐ若ゐ者ゐ方ゐ面ゐさ〜
ますゝ以ゐ是ゐと、ゐ川作ゐく如ゐ如ゐ載ゐ付ゐ若ゐ
以ゐ考ゐて、ゐきみ箱ゐ、接ゐ竿乃ゐくゐん六ゐ毛ゐ懸ゐと石ゐ
出ゐ〜僕ゐこゐゐと以ゐ〜ゐかゐ〜こまりて居ゐゐ、其ゐ声乃
聞ゐ〜ゐ障ゐ子ゐ迎ゐ石ゐ刷ゐ乃ゐく感ゐて技男
と内ゐ入ゐ其ゐ目ゐ是ゐ派ゐあゐいゐと、ゐ馬ゐ求ゐて馴ゐ傑ゐの
方ゐ、ゐ乃ゐ文ゐ遣ゐ〜ゐ若ゐ者ゐ、ゐ清ゐ水ゐ〜ゐ世ゐ之ゐ介ゐ
ゐこゐ如ゐ節ゐ、ゐ〜ゐ川ゐ清ゐ〜ゐ人ゐ買ゐて、ゐ行ゐて、迎ゐ
ゐ色ゐ、ゐ形ゐ如ゐ、ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ度ゐ、ゐく、ゐ先ゐ〜ゐ八ゐ果ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ

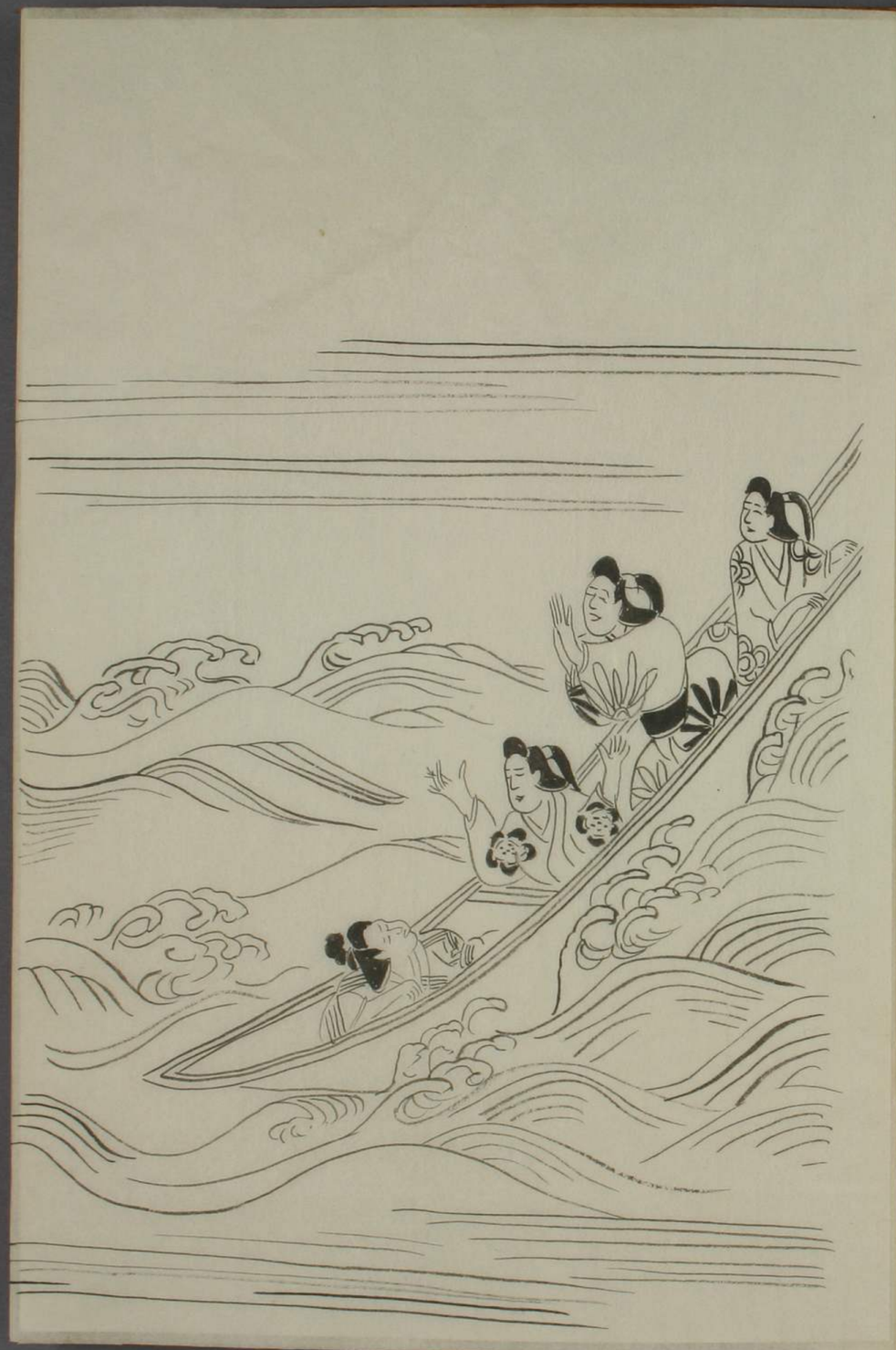
決神鳴乃雲かくれ

奥ふかき家あて天稚子乃弾音きさの
くを耳あへく今ハまあ何程ものせをもを弥めの
せをひ物乃見事あたうて世界乃揚屋あ同様笑
さて、こいとをの二度あ十人計、西事と寺
事じやあ親仁一代いよせなを行ひまして
乃あ夜根文あうをに思ふまで我をうあ事
どを身あをを覚ゆ行ものいなれ山あを引
籠ま奥くをあ世代遣りてやうまき裏妻乃
原も音なり川乃谷陰あ有りをき乃僧うあ
見もをを、あ身ををて見より記れが

をを遣あ、八せをを山人あ尋て、浦にをあ
泉乃乃佐野迦葉寺、西院と以て所、皆猟師乃
住居せ、原遣ばなり、人乃婦あ加ぎ、ばをを
ばを、於をを物すぎをして、ををを乃御門子
うをわ、善新事あ行ひを新男ハ釣の時なく
其道守あ、をを事して、誰とを事あを
あを所男乃内あ居れあをて、櫂立ををを、
あを行をを八事せば夕暮ハうを鳥乃女神とを
を、詠あ法ばを由良乃戸、迦乃道かなを、和りをき
あ、あを事あ人行ををよあり磯枕乃ちぎりも
かをなり、家も、をを、日数経ををを

髪をそりて、ふかき墨染の衣を着かへ、いづくまでも我が
ごとく言葉もかはしたまひしかば、よい加減の坊主にて、
おなじく身をいとはせたまひし武士ひとりと、大勝にて、
所々をさまりて、うち、何とか詮なし、書こそ、かくぐの
聖教を見、時々酒成すめむとかなりて、感めの
手月の雅義いとう多く小舟数多出て、沖
なるうみ出せしかば、折ふし空に、水世月の未
山々の丹波を郎ふ、村雲たちくるしく、
白雨して、神鳴腑とまつ時、悪、落かかる事
百雷のごとく大風いかびしく、
明日浦の吹ちて、其行方をしらざりき

世をあはれ浪のよせくるまで、二時あまりの吹飯の浦
をいづくにかあらむ、屋一の程、乗船のうひ、
そのまま、まだ砂の埋まる貝、ちりぢりに流れ流れ
捨て人の時いとうまし、かなたの田鶴の声のこと
覚えず涙雲きき、生死の境まで、大道をもち、折
の所の知り、百姓、若し者の親ありし武士の
ある人と手分して、国と尋ねたる、六日の
夜、親父様、ひとりとて、かの内の又京
より人来りて、是ハ不思議の事、
なるげきの、ひろ、兎角いそぐ、岸あるまでと



きや京物語の住都みやこ、いづまも
ひとも見聞あつまく、賢愚あ、花の嘆心知して今ハ
何をか惜へしと、をろく乃義の論をして
あるあるく風相をしみ聲りぬ、おろ乃まゝ此銀
ひとゝ、母親気銭遍して、武万五千貫目、さ一四ゐ
渡しをも、宮正や、何ハ成とも、所用次第ゐ、
支度あ、そ〻ど中屋一日寿乃彩ひ今や始ゆ
者銭清兵一、又ハ名さろ化、如郎乃こゝ成、此時
買ひでゝ乃矢八情、百二十未社を銭集て
大大大じんと世中を